

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二7:5~16 「慰めの神」

[5-6]「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちに慰めてくださいました」

パウロは最初、コリント教会の問題解決のためにテモテを送った。→Ⅰコリント4:17
しかし、あまり良い効果を上げることができなかつたようである。それでパウロは今度は自分自身、短期間コリントへ行くが、これも調整不十分に終わり、失意のうちにやむなく彼は涙の手紙とも悲しみの手紙とも言われる手紙をコリント教会にあてて書いた。→Ⅱコリント2:3~4
そして次にテトスを送り、コリント教会の問題を解決しようとした。パウロはトロアスでテトスが帰って来るのを待っていたが、そこでは会えず、ついにエーゲ海を渡ってマケドニヤまで行った。→Ⅱコリント2:12~13
その時の心境がここで述べられているのである。「外には戦い」とは伝道のための様々な迫害や苦しみ。「うちには恐れ」とはコリント教会の人々がパウロの思いに反して神のみこころにかなわないような生き方をしているならば、彼らに対する信頼が吹き飛んでしまうとの恐れであったろう。しかし神は気落ちした者を慰めてくださる神であった。テトスは良い知らせを持って帰ってきたのである。

[7]テトスがコリント教会へ行った時、人々は彼を温かく迎えてくれたので彼は非常に慰められた。またそれを聞いたパウロ自身も慰められた。テトスは彼らがパウロを慕い、様々な問題を放置していたことを嘆き悲しみ、また彼に対して熱意を持っていることを知らせたので彼はますます喜びにあふれることができた。

[8-10]「あの手紙」とは「悲しみの手紙」のこと。この手紙において、パウロは彼らを激しく責めたゆえに彼らは悲しむ結果となり、パウロもそれを聞き、悔いた。しかし今は喜んでいいる。なぜなら彼らが悲しんで悔い改めたからである。ここでは悲しみに二種類あることが教えられる。①「神のみこころに添った悲しみ」…神に対して申し訳ないことをした。それをやったことは罪だったという思いであり、真の悔い改めに至らせるもの。→詩篇51ダビデの例 ②「世の悲しみ」…神から離れ、神に反逆した結果の悲しみ。これは死をもたらす。→マタイ27:3~5イスカリオテのユダの例

[11]神のみこころに添って悲しんだ結果、それはコリント人たちに熱心さを引き起こした。これは信仰の熱心、神への熱心、教会への熱心であろう。そればかりか、自分たちの失敗をはっきり言い表して弁明し、パウロに対する不当な侮辱に対して憤り、自分たちのしたことが神の怒りを招くことを恐れ、パウロに対して深く慕う心を抱くようになり、悪を行う者に対しては戒規に処するという熱意を起こさせ、処罰を断行させるようになった。「あの問題」とは何を指すのかは不明。「自分たちがすべての点で潔白であることを証明した」とはパウロが「あの手紙」で非難したことにに関してコリント人たちは悔い改めて潔白を証明したの意。

[12]パウロが「あの手紙」を書いたのは悪を行った人を罰するためではなく、またその被害者の身の潔白を示すためでもなく、パウロたちに対するコリント人たちの熱心が神の御前に明らかにされるためであった。なぜならその熱心が教会の一致を実現させ、教会は建て上げられていくからである。熱心の内容は11節で述べられている。パウロはいつでも教会を立て上げることによって神の栄光を現すことを目的としていた。

[13-16]13節以下はパウロが受けた慰めに対する結びのことばである。

パウロの喜びはテトスがコリントで受けた喜びによって、ますます増し加わった。パウロはコリント教会のことを問題があっても信頼し、テトスにもそのことを誇っていた。そして実際もそのとおりであったので彼は恥をかかずに済んだ。彼は今、コリント人たちに全幅の信頼を寄せ、喜ぶことができるのである。

神は恐れる者、気落ちした者を必ず慰めてくださるお方である。この全能の愛なる神に信頼して、私たちもどのような困難な時にも神からの豊かな慰めをいただき、信仰生活を全うしていきたい。